

平成23年度購入文化財一覧

【京都国立博物館】(計7件)

- 1 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 春秋禽狗遊楽図屏風
 (しゅんじゅうきんくゆうらくずびょうぶ)
 ○時 代 江戸時代初期(17世紀)
 ○品 質 紙本金地着色
 ○員 数 6曲1隻
 ○寸 法 等 縦61.0cm 横190.0cm
 ○作品概要 可憐な小屏風。右3扇は「鳥の品評会」の景、左3扇は「闘犬」の景。人物の顔は、剥落や傷が少なく、涼しげな眼が印象的な可憐な表情をしめしている。着物はとても細かく、さまざまな色や模様がみられる。闘犬や鳥の品評会の描写はきわめて珍しく、大きく張り出した縁台の描写も特異。画風等から、制作時期は17世紀後半、寛文年間と元禄年間の間、すなわち延宝・天和・貞享期(1673~88)ころと推定される。鳥籠を描いた屏風としては、「鳥合せ図屏風」や「誰が袖図屏風」、「鳥籠絵屏風」など、江戸初期、17世紀の屏風が知られるが、購入作のように人々の営みの中に、多数の鳥籠が登場するものは他に例をみない。希少な風俗画の貴重な作例といえよう。
 ○購入金額 5,775,000円



(部分)

- 2 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 梅枝双鳥図(ばいしそうちょうず)
 ○作 者 等 徐悲鴻筆
 ○時 代 中国 中華民国20年(1931)
 ○品 質 紙本墨画着色
 ○員 数 1幅
 ○寸 法 等 縦82.4cm 横46.8cm
 ○作品概要 近代中国を代表する洋画家の徐悲鴻(1895-1953)が描いた水墨の花鳥図。春の到来を告げる鵲のつがいが紅梅の枝先に止まり、新春を寿ぐ。民国20年(1931)に「萬先」なる人物に贈られた一幅で、その後、昭和初期に活動した日本の外交官で南京総領事などを歴任した須磨弥吉郎(1892-1970・号は昇龍山人)のコレクションに入った。徐悲鴻は幼名を寿康といい、江蘇宜興の出身。フランスとドイツに留学して培った写実主義にもとづくアカデミズムを本領とし、その後の中国での社会主義リアリズム隆盛の端緒を切り拓いた。本図が描かれた民国20年ごろの徐は国立の中央大学芸術系で教鞭を執っており、南京を拠点に制作活動を展開していた。
 ○購入金額 3,000,000円



- 3 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 山水図冊(全九図)(さんすいずさつ(ぜんきゅうず))
 ○作 者 等 蘇仁山筆
 ○時 代 中国・清時代 道光7年(1827)
 ○品 質 紙本墨画
 ○員 数 1帖
 ○寸 法 等 (各)縦25.5cm 横33.3cm
 ○作品概要 清末の広東を拠点に活動した奇想の画家・蘇仁山(1814-

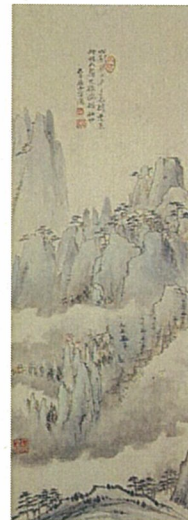


1850?)が画いた最初期の画帖。蘇仁山は、初名は長春、字は仁山。後に仁山を名、長春を字とした。号は玄妙觀道士、嶺南道人など。教圃、靜甫、七祖、棲霞とも署す。広東順徳の人。その画の題識は難解で、ときに儒教批判を展開。山水と人物を得意とし、『芥子園画伝』や『十竹齋書画譜』などの木版画譜を典拠にした白描の山水や樓閣の稠密な描写は他に類例を見ない。道光7年(1827)、蘇仁山十四歳の作である本図冊は、全九図ともに欠損箇所が多いものの、その学習の過程がよくわかる優品である。須磨弥吉郎の旧蔵品で、広東総領事時代の須磨が積極的に収集したことでその名が世に知られた。

○購入金額 7,000,000 円

- 4 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 山水図(黄山文殊院)(さんすいず(こうざんもんじゅいん))
 ○作 者 等 張大千筆
 ○時 代 中国 中華民国時代(20世紀)
 ○品 質 紙本墨画淡彩
 ○員 数 1 幅
 ○寸 法 等 縦 94.7cm 横 33.0cm
 ○作品概要 中国有数の名山中、安徽省にある黄山の一景を描いた山水図。天都峰と蓮花峰の間に位置する玉屏峰にある文殊院を目指して、二人の高士が険しい峰々を登ってゆく。題識は、明時代の普門和尚の開創になるこの名刹の対聯の句(楹帖)を収録する。筆者は張大千(1899-1983)の名は爰。字は季爰、またの字の大千で知られる。号は大千居士。原籍は広東で、四川内江の生まれ。上海で曾熙、李瑞清に師事した。張は若いころから石濤が周遊した黄山に親しみ、明末清初に黄山周辺で興隆した新安派の漸江や梅清からも多くを学んだ。本図の細筆による特徴的な峰々の稜線は漸江の、本紙を淡く彩るその色調は梅清の画を彷彿させるものがある。須磨弥吉郎の旧蔵品。

○購入金額 3,000,000 円



- 5 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 大雞小雞図(だいけいしょうけいず)
 ○作 者 等 齊白石筆
 ○時 代 中国 中華民国時代(20世紀)
 ○品 質 紙本墨画淡彩
 ○員 数 1 幅
 ○寸 法 等 縦 135.7cm 横 34.0cm
 ○作品概要 雄鶏と雛を描いた家族愛にあふれた一幅。筆勢のある墨線を重ねて華やかな雄鶏を描き、墨のたまりでよちよち歩きの雛を表わす。墨と朱の濃淡のみで鶏雛を表現した本図は、素朴な味わいをもつ齊白石(1863-1957)の翎毛画の本領を示す優品である。齊白石は名を璜といい、白石の号で知られる。湖南湘潭の人。貧農の家に生まれ、木工職人のかたわら絵を学び、鮮麗な水墨淡彩の花卉や翎毛の画は近代中国を代表する画家の一人としてその画名を高めた。本図の題識は、前漢の高祖の孫で『淮南子』の主著者である劉安にちなんだもの。白石は老いてゆく自分と生命力あふれる雛と鶏を対比させ、恬淡とした心境を表明している。須磨弥吉郎の収集品。

○購入金額 10,000,000 円



- 6 ○種 別 <金工>
 ○名 称 銭弘俶八万四千塔（せんこうしゅくはちまんしせんとう）
 ○時 代 中国・五代 10世紀
 ○品 質 銅鑄造
 ○員 数 1基
 ○寸 法 等 総高 21.0cm 身高（屋蓋）9.5cm 基壇幅 8.0cm
 ○作品概要 中国の呉越国王銭弘俶がインド阿育王の造塔故事にならい造塔した八万四千塔のうちの一基。塔身内面に「乙卯歳」と刻し顯徳二年（九五五）の発願と知られる。身部各面と屋蓋、その四隅の方立、相輪を別々に鑄造し鑢付する。身部には龕形内に本生図、須弥壇部に如来坐像、四本柱上に鳥形（迦楼羅か）などを陽鑄で表し、内面には「呉越國王／銭弘俶敬造／八萬四千寶／塔乙卯歳記」と銘を陰鑄し、鉤形の突起を鑄出する。本品は近代に日本へ持ち込まれたものだが、日本でも大峰山寺境内と那智経塚の出土品や、京都・金胎寺、大阪・金剛寺、同・来迎寺、福岡・誓願寺の伝来品が知られ、日中間で仏教文物が行き来したことを象徴する事例である。

○購入金額 12,000,000 円



- 7 ○種 別 <染織>
 ○名 称 染分縮緬地文字入扇面桜・雪景橋に松竹梅文様友禅染繡小袖（そめわけちりめんじもじいりせんめんさくら・せっけいはしにしょうちくばいもんようゆうぜんぞめぬいこそで）
 ○時 代 江戸時代 18世紀
 ○品 質 絹（縮緬地 染・繡）
 ○員 数 1領
 ○寸 法 等 丈 149.5 cm 衿 57.0 cm（いずれもフキを含む） 袖丈 37.0 cm
 ○作品概要 上半身は淡い黄色、下半身は浅葱色に染め分けられた小袖で、前者には扇面と八重桜を背景に大振りな文字を散らし、後者には雪の降り積もる橋と松竹梅を置いている。いずれも友禅染を主体にしつつ、随所に刺繡を加える。文字は藤原定家の詠歌である「駒とめて袖うちらはらふ影もなしさののわたりの雪のゆふぐれ」（『古今和歌集』）を典拠とする。この一首の歌意と小袖の文様は、下半身の雪景において呼応するのであろう。この小袖のように、腰を中心に上下でまったく異なる文様を配する小袖は、雛形本では正徳年間を中心に流行しており、この小袖の製作年代もその頃に当てることができよう。

○購入金額 1,890,000 円



以上